

2025年11月16日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教60「わたしは彼を起こしに行く」

ダニエル12：2～3、ヨハネ11：1～16

第11章はラザロが病気で死ぬところから始まります。死んでしまったらもう終わりではないか。どうしてイエスさまは死なないようにできなかったのか。多くの人はそう考えるかもしれませんが。このラザロの兄弟である二人の姉妹マルタとマリアが登場してきますが、彼女たちも「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」（21、32節）と繰り返し言います。ここには少し未練がましいニュアンスが込められています。どうしてもっと早く来てくださらなかったのですか。確かに姉妹たちは、ラザロが病気で苦しんでいるときに、イエスさまのところに人をやって、ラザロの容態を告げています。「あなたの愛しておられる者が病気なのです」（3節）だから早く来てください。死ぬ前に治してしてほしい。どうして「死ぬ前に」という心理が働くのか。それはやはりその先のことが見えない、わからないからです。ラザロの物語がラザロの死から始まるのは、言わば、信仰がその先のストーリーをわたしたちに見させているということです。死んでおしまいではない。そこからの命がある。キリスト者とはそういう世界を見ている者のことです。

「この病気は死で終わるものではない」（4節）何度か説教でも紹介したことがありますデンマークの思想家キェルケゴールの代表的な著作『死に至る病』はこのイエスさまの言葉から始まります。ラザロは死んだ。にもかかわらず、死に至っていない。それはよみがえりであり命であるイエスさまがそこにおられるからだと言っています。この病が死で終わらないことの根拠、それはイエスさまとの関わり、その一点にかかっています。でもそれは逆を言えば、もしイエスさまとの関わりがなければ、わたしたちはただ死に至るだけの人生になってしまうということでしょう。

それは人間が神さまに対して罪を犯したところに遡ります。約束を破ったアダムに神さまは「塵にすぎないお前は塵に返る」（創世記3：19）と言われました。そこから人類の死に至る歩みが始まりました。キェルケゴールは「死に至る病は絶望である」と言いますが、罪が絶望を引き起こす。そしてその絶望はやがて人を死に至らせるのです。この絶望についてキェルケゴールはとても詳しく論じています。その中で絶望とは「自己をもっていることを意識していない」ことだと言います。よく生きる意味、目的が見出せなくて悩むことがあります。アイデンティティクライシス（自己喪失）とも言われますが、そういう状況に陥る人は多い。思春期などの若い世代から始まり、最近ではミッドライフクライシス、中高年にもその傾向があると言われる。定年となり仕事を終えて、子育てが終わって、急に生きる目的がなくなってしまったと感じる。自分に存在価値を見出せなくなる。それは孤独と結びついているのではないのでしょうか。特に中高年は人との関わりが徐々に薄れていきます。それまでは社会の中心で働いていたような人が会社を辞めて急に社会との関わりがなくなる。家族や親しい友との別れが増えてくる。そういう孤独感が自己喪失を生み出していきます。

考えてみれば、罪の状態も孤独です。関わりを失っていくことにあります。まず神さまとの約束を破り、神さまとの関わりを失います。楽園を追放されます。また神さまは「人が独りでいるのは良くない」と言われ、アダムにエバを与えられたけれども、神さまとの関係が破綻すると、この人間同士の関係も破綻していきます。カインは弟アベルを殺すのです。そのようにし

て人はますます孤独に陥っていきます。関わりを失っていく。そしてこの孤独の行き着くところがまさに死なのです。パウロも「罪の支払う報酬は死です」(ローマ6：23)と述べています。罪、あらゆる関わりが断絶したところ、その孤独の極みこそ死です。そこに死に至る病がある。けれども、そこから神さまはわたしたちをお救いになられるのです。あなたを孤独にはしておかない。死の中に捨て置かない。神さまはそのような決意を持ってイエスさまをくださいました。

何よりこの部分でひとときわたしたちの心に留まるのは、イエスさまがラザロを愛しておられたことです。「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」(3節)「イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」(5節)この後、36節でも涙を流されたイエスさまに対して「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と人々が言います。ラザロの物語ではイエスさまの愛が強調されています。罪に支配され、孤独に陥っていくわたしたちをそれでもイエスさまはなお愛し続けておられる。どんなにわたしたちが離れようとも、裏切ろうとも、それでもあなたを愛している。神さまの愛が孤独に勝るのです。

その愛に溢れているイエスさまの言葉が11節です。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く」もちろんこの「眠っている」というのはラザロの死を意味しています。だからイエスさまもこの後で弟子たちに「ラザロは死んだのだ」(14節)とはっきりおっしゃいました。けれどもここでは「眠っている」と言われる。これはイエスさまがラザロの死を認めていないということです。どうしてか。それはイエスさまがラザロを愛しておられるからです。ラザロは孤独ではないのです。しかもここでイエスさまはラザロのことを親しみを込めて「友」と呼ばれます。イエスさまがここでラザロを「友」と呼ばれたのは、イエスさまの愛です。この後、イエスさまはぶどうの木の手ぐさのところで「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(15：13)とおっしゃった。その通り、イエスさまは友であるラザロのため、わたしたちのために十字架で命を捨ててくださいました。そのようにして愛を示された。こんなにも愛されているラザロが孤独であるはずがない。死の中に捨て置かれるはずがない。彼は眠っているのだ。だからわたしがラザロを起こしに行く。

「わたしは彼を起こしに行く」(11節)今日はこの言葉を説教の題にしました。この言葉は、もちろんこの後のラザロのよみがえりを示していることは言うまでもありません。けれども同時にラザロを起こしに行くそのところでイエスさまが十字架におかかりになられたことを忘れてはなりません。ラザロが死の中に、孤独の中に捨て置かれなかったために、イエスさまが先回りをするようにして、その死の孤独を味わわれた。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と十字架上で叫ばれ、神さまから見捨てられる最大の孤独、罪ゆえにわたしたちが負うべき孤独をイエスさまが引き受けてくださった。そして死の孤独からわたしたちを救い出されるために三日目によみがえられたのです。イエスさまに結ばれて、またラザロもよみがえり、新しい命の中へ移されます。わたしたちもそれに続くのです。だから決して孤独ではない。キリスト者に「孤独死」はありえない。たとえ一人きりで死んだとしてもわたしたちは一人ではない。イエスさまが共におられます。

天の父よ。私どもを友と呼んでくださり、愛の交わりの中に生かしてくださる幸いを覚えます。どんなに孤独を感じても、死の中にも、病の中にも、そこにもイエスさまがおられることを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。